講　　評

評価委員　内　藤　寿七郎
（総合母子保健センター　愛育病院名誉院長）

吾国の小児保健はその死亡率が世界最低であることによって示されるようにその生命維持と身体発育については素晴しい結果をもたらしたがその心の発達に関しては今一歩というところであろう。併し心だけが独り歩くのではない。あくまで身体あっての心であろう殊に乳幼児期は両者の関係は強い。厚生省に於ては母子相互作用の研究班を６年に亙って（小林　登班長）組織されその結果漸く小児の心の発達は母親の対応と強い因果関係を持つこと殊に出生直後から乳幼児期に於いてそれが著しいことを示唆する結果を示した。之についてはマスコミも断片的にではあったが世に紹介して大きな反響を呼んだ。

身体の発育を論ずる場合最終発達の到来は18～20年の長期に亙ることを念頭に置くのだが心の発達も同様であろう。今回高石昌弘新研究班長の許で主題の如きテーマで研究持続が行われることは吾国の未来のために喜ばしいことである。バランスのとれた心の働きを持つ人間を作るにはどのような家庭が望ましいものであるかが追求されることを期待し度い。

家庭も三世代以上の同居と核家族，更には母が専業主婦か有職か，また母親自身の気質によってもそれぞれ異った育児環境となるであろう。あまりにも関係分野が広いので短日月で結果は出ないことと思われるが，関係各学問分野の方々の発表会での十分な討論こそが望まれるところである。

今回の発表は23題であり何れも本研究班の主旨に副ったもので重要なものであったがその中から筆者は１，２のものについて意見を述べ度い。高橋　種昭氏等父母の養育態度とその評価に関する研究は今回父親に関するものであった。父親の関わりは直接乳幼児に接触することもあろうが，育児に専念する母親を通じて，育児に参加している場合も多々あるであろうが，形となっているものは評価されるが無形のものの評価も少なくないであろう之の評価をも加えて欲しいものである。八倉巻　和子氏の，食行動と養育条件の研究で食行動のトラブルと乳児期の母乳栄養，人工栄養との関係はどうであったのか，養育条件の中に母親の気質との関係などについて追及して戴けたらと思った。加藤　忠明氏の乳児の発達についての研究は，とかく横断的なものになり勝ちのものを縦断的に追求している点は頷かれる要に幼児期，学童期にまで及ぼせたらと願わずにはいられない。

心の発達は中枢神経の発達とその活動による理であるが，大島　清，林　基治氏等の猿を胎児期から４～５カ月更に成熟猿にまで及んだ中枢神経活性物質（ペプタイド）の研究は貴重であった。猿の胎児期と４～５カ月，（人間ならさしずめ幼児期相当か）に之等ペプチドが多く，成熟猿に予想に反して少なかったとの研究は，人間育児の場合も胎児期，乳幼児期の脳の発達を十分に遂げさせる環境を与えることが如何に大切であるかを示唆する重要なものであると思う更にその研究の発展を願うものである。